ポルトガル語・スペイン語語彙クレオル語学会に参加して

Presença no Colóquio sobre Crioulos de Base Portuguesa e Espanhola

市之瀬　敦

Atsushi ICHINOSE

１９９４年９月３日から６日までの４日間、ブラジルのブラジリア大学で、ポルトガル語とスペイン語の語彙を基に形成されたクレオル諸語に関する国際会議(Colóquio sobre Crioulos de Base Portuguesa e Espanhola)が開かれ、筆者も参加した。主催はブラジリア大学文学部、運営委員長は同学部言語学科のイルド・オノリオ・ド・コト教授であった。コト教授は１９９０年から、ポルトガル語およびスペイン語語彙クレオル諸語に関する研究論文を集めた雑誌『PAPIA』の編集も担当しており、この分野では研究者としてだけでなくオーガナイザーとしても中心的な役割を果たしてきている。

会議には、ブラジル各地の大学から多数の研究者が参加したほか、海外からはドイツ、フランス、ポルトガル、アメリカ、マレーシア、西アフリカの島国カボ・ベルデそして日本から研究者が集まった。中でもドイツからの参加者が多く、ピジン・クレオル諸語研究のパイオニア的存在であったフーゴ・シューハルトの遺産が今もなお同国に息づいていることを感じさせた。また、カボ・ベルデとマレーシアからの参加者二人はクレオル語のネーティブ・スピーカーであり、会議の参加者の間でもその存在はひときわ注目を集めていた（カボ・ベルデでは約４０万人の国民全体がポルトガル語語彙クレオル語を話し、マレーシアではマラッカにあるPortuguese Settlementでパピア・クリスタンというポルトガル語語彙クレオル語が現在も約２０００人の住民により話される）。

４日間におよんだ会議の期間中には、２７人が研究発表を行ったが、そのテーマは広範囲におよび、ピジン・クレオル諸語に関する言語学的な考察だけでなく、文学、音楽そして人類学的な視点を持った研究もあり、どの言語の語彙を基にしているかに関わりなく、ピジン・クレオル諸語研究が言語学の枠を越えさまざまな分野に広がり得ることを示した。ここでは２７人すべての研究発表の内容に触れることはできないが、筆者の興味を特に引いた発表の要旨をいくつか紹介しておきたい。

カボ・ベルデからただ一人参加したドゥルセ・アルマダ・ドゥアルテは、自国の社会言語学的状況について詳細な報告を行った。カボ・ベルデでは国民全体によりクレオル語がその殆どすべての母語として話される一方で、１９７５年の独立以後、公用語として採用

されたポルトガル語は国民の１割か２割によってしか話されない。これまでクレオル語の公用語化のために正書法制定の試みは何度も行われてきたが、いずれも議論の段階で終わり実行に移されることはなく、今も日常の口頭コミュニケーションで使用される話し言葉のままである。ドゥアルテによれば、このDIGLOSSIA的な状況は、ポルトガル語の影響による脱クレオル化を促しているという。また、今後クレオル語が文字化され、公用語としての機能を果たすようになったとしても、ポルトガル語からの影響が弱まることは予測できず、言語学者や作家にとり、カボ・ベルデ人の文化的アイデンティティの拠り所であるクレオル語をいかにポルトガル語から守るかという課題が与えられることになるだろうと述べた。カボ・ベルデのクレオル語は１９世紀末から文法的記述、詩の創作が行われ、他のクレオル諸語に比べ否定的な態度をとられる度合いは低かったといえるのだが、ドゥアルテの発表により、それでもやはり公用語からの脅威にさらされていることは他のクレオル諸語とかわらないことが明らかにされた。

筆者はかつて、ブラジルの主に非識字者により話されるポルトガル語の変種（「ブラジル民衆ポルトガル語」と呼ばれることが多い）に見られる言語的特徴の由来を考察するうえでクレオル語の影響を考慮する必要があると指摘したことがある。これまでブラジルではその変種にクレオル語の影響を認めるべきか否か激しい議論が繰り返されてきたのだが、今回の会議で「ブラジル民衆ポルトガル語」を取り上げたマリア・ロザとマリア・モニカは、クレオル語的と見なされる諸特徴は古ポルトガル語にすでに見られるものであるとし、クレオル語の影響を認めることに否定的な見解を示した。両者の指摘は説得力に富んでいたが、しかし、「ブラジル民衆ポルトガル語」に見られる諸特徴の由来のすべてが解明されたわけではなく、クレオル語の影響を考慮する必要がこれでなくなったとはいえないと思われる。

文化人類学者ウィルソン・フィリョは、ギニア・ビサウのポルトガル語語彙クレオル語で語られる物語にアフリカの伝統文化との継続性が見られることを明らかにした。フィリョによれば、現在クレオル語で語られる解放闘争に関する物語の中で英雄が危機的状況を逃れるために姿を消してしまうことが多いのだが、それは西アフリカ諸語で語り継がれてきた物語にもよく見られるパターンであり、現世から一度消えて別の人格として戻ってくると想定される通過儀礼がその根底にあるのだという。同氏が主張する、ギニア・ビサウという国自体が現在、成熟した国家として脱皮するために通過儀礼の過程にあり、その変化がクレオル語の物語で解放闘争の英雄が姿を消すという展開により象徴されているのだという見解はきわめて興味深い。そして、クレオル語で語られる物語にアフリカの伝統文化との継続性が見られるという事実は、クレオル語そのものにアフリカ諸語からの影響

が見られるのではないかと予測させもするのである。

１９８０年代前半、デレク・ビッカートンはクレオル諸語の諸特徴は上層語や基層語の構造の反映ではなく、それらは言語の普遍性を顕在化したものなのだという仮説を唱え、広く注目を集めた。ドイツのユルゲン・ラングと筆者はそれぞれカボ・ベルデとギニア・ビサウのクレオル語に見られる基層語（西アフリカ諸語）の影響を受けたと思われる現象を指摘し、言語の普遍性を考慮する必要があることはもちろんだが、それだけではピジン・クレオル諸語の構造を解明することはできないと主張した。基層説と普遍説の対立はクレオル諸語研究の始まりとともに古く、現在は言語普遍も基層語の影響もともに重視する研究者が増加しているが、具体例を出しながらの両者の研究発表には説得力があるという評価が与えられた。

この他にも、マカオや１０年前に存在が確認されたばかりのコルライ（インド西部）のポルトガル語語彙クレオル語、カリブ海地域のスペイン語語彙クレオル語に関する内容の濃い発表もあり、収穫の多い４日間であった。運営委員長のコト教授が閉会の辞で述べた「ブラジルのような経済的困難を抱えた国の人間がクレオル語を研究する意義があるのか自問することも多いが、外国の人間がクレオル語を研究していると知ったとき、クレオル語の話者が示す喜びの表情を見るだけで、我々の努力は無意味ではないと確信する」という言葉に大いに共感を覚えた。最終日の夜、海外からの参加者が繁華街のレストランに集まり、別れを惜しむかのように夜更けまで話し込み、そして２年後ドイツでの再会を約束した。

なお、会議で発表された研究の大部分は『PAPIA』３巻３号に既に収録されており、残りは同誌次号に掲載される予定である。